

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏

名

李 錚

論文題目

唐代的術数与思想

—— 吕才与《阴阳书》

(唐代の術数と思想—呂才と『陰陽書』—)

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 吉田 純

委員 名古屋大学教授 加藤久美子

委員 名古屋大学准教授 林謙一郎

委員 名古屋大学准教授 佐野大介

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の概要】

本論文は、大概魏晋南北朝から隋唐にかけての術数（陰陽五行説に基づく占い）の諸相を明らかにし、術数文化と社会思想との関係を検討しようとしたものである。その際、特に、唐の太宗期に勅撰術数書として呂才により編纂された『陰陽書』に注目した。この書は早くに散逸して現在は「叙宅経」「叙禄命」「叙葬書」という三篇の序文を残すのみであるが、ここでは呂才以前から民間に流传していた他の『陰陽書』の迷妄が批判されている。論者はそこから、唐代初期あるいはそれ以前の社会で、術数がどのように扱われていたかを考察した。また論者は、術数と関わる数多くの敦煌文書も検討し、呂才の『陰陽書』とも比較しつつ多角的に議論した。

第一章では、呂才の生涯と『陰陽書』を含む呂才の著作について詳しく検討した。第二章では、姓を五分類して五行の属性と関係づけ居住する家屋の吉凶を占う五姓法について、その成立・発展・衰退・消滅の過程を検討した。また、『陰陽書』の序文第一篇「叙宅経」において呂才が五姓法に対して加えた批判についても考察を加えた。第二章の付論では、先行研究と目される張魯君・韓吉紹の共著論文《四件敦煌道经残片考辨》を参勘しつつ、五種の鉉物からなる五石散という薬の処方と見られてきた敦煌文書の三つの残片が、実は屋敷の各方角に置く特定の色彩・重量の石塊と供え物を示す鎮宅文であったことを論じた。第三章では、呂才の『陰陽書』序文第二篇「叙禄命」の内容を中心に、敦煌文書中の関連文書も検討することによって、唐代の禄命術（寿命と榮枯盛衰などの運勢占い）の特徴を分析した。第四章では、呂才の『陰陽書』序文第三篇「叙葬書」に加え『唐会要』や関連の敦煌文書、唐代の墓誌銘から、唐代の葬送習俗について考察した。呂才が「叙葬書」を著したのは民間の埋葬を巡る因襲が儒学の礼に背き社会に悪影響をもたらしていたからであることが示された。また、葬儀の日の選択については、政治変革や社会変化にともない唐代の貞観 16(642)年から天宝元(742)年までの百年間に大きな変化が見られたことが明らかにされた。第五章と第六章では、日本に伝わった呂才の『陰陽書』と見られる『大唐陰陽書』を研究対象とした。第五章では京都大学蔵『大唐陰陽書』について脱漏部分の補正をしつつその内容を検討した。中国では「大禍」と「滅門」に加え「魁罡」も遅くとも唐の咸通 5年（809年）までに葬事凶日とされるようになったが、日本では「魁罡」が葬事凶日とされることはなかった。その理由として、「魁罡」はもとは民間での考え方であり唐の朝廷に正式に認可されなかったこと、日本では宣明暦が使われ続け「魁罡」を葬事凶日とする新たな暦が使われなかったことが提示された。第六章では、『大唐陰陽書』の現存する七つの版本間の関係を明らかにした後、国立国会図書館蔵『大唐陰陽書』の内容、特に八将神信仰に論及し、日本中世以来の暦道において独自の変化があったことを指摘した。結語では、以上の内容を踏まえて、呂才の『陰陽書』とその内容が唐代の政治・社会、宋以後の術数思想、対外文化交流に与えた影響について論じた。

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の評価】

民間で行われた占いは庶民が日々の暮らしの中の様々な吉凶を知ろうとするもので好個の研究対象であるが、手がけることの難しさから等閑視されてきた感がある。論者は、呂才の『陰陽書』を手がかりに、その課題に意欲的に取り組んだ。

唐の人、呂才の名は今日でこそあまりよく知られないが、その迷妄を打破する姿勢が中華人民共和国成立当初の国是に合致していたため夙に侯外廬の『中国思想通史』に取り上げられている。以後研究は途絶えていたのを、論者はかれの経歴や著作について詳しく明らかにし、呂才が編纂した勅撰の術数（陰陽五行説に基づく占い）書『陰陽書』の序文、「叙宅経」「叙禄命」「叙葬書」を検討して、呂才以前に民間に流伝した『陰陽書』の誤謬を呂才がいかに批判したかを示した上で批判的になった内容も併せて論じた。この点で本論文は高く評価できる。また、呂才の『陰陽書』以外の文献、特に数多くの敦煌文書を検討することによって、大概魏晋南北朝から隋唐にかけての術数の諸相を多角的に明らかにしたという点でも、本論文の功績は顕著である。さらに術数文化の変化を唐宋変革と関係づけて議論しようとする姿勢は、歴史学分野の研究を含む幅広い知識を論者が有していることを示しており、中国哲学分野のみならず、中国史研究に対しても重要な示唆を与える研究であると位置づけることができる。一方、呂才の『陰陽書』が日本に伝わったものである『大唐陰陽書』の検討においては、日中比較文化の観点からも興味深い所論が見られる。

本論文において考察が進められる過程で提示された各種の図表も、各種文献の詳細な検討内容をまとめたものとして非常に価値が高い。例えば、数周堂法（嫁入りの占い）の図や、唐代皇帝の葬事が行われた日が五行の属性でいうと何の日であったかを示す表、貞観16(642)年から天宝元(742)年までの百年間の李氏墓誌銘から得られたデータを網羅的に提示する表などである。

しかしながら本論文に不十分な点が無い訳ではない。論者は、呂才の『陰陽書』が唐代やそれ以降の社会の変化に大きな影響を与えたとしたが、それがどのような過程でなされたのかについては、具体的に示していない。しかしこれは、歴史学の分野においてなされるべき研究であり、論者の専門を超えるものであるとも言えるかもしれない。また、本論文は中国語で記述されているが、日本の学界にも大きく貢献できる成果であるだけに日本語で論述がなされなかったことは、ある意味残念でもある。しかし、逆に、中国語で書かれたことで、中国の学界に対してはただちに影響を与えられる研究であると言える。この点については、今後日本語での研究成果発表もおこなうなどによって補うことを論者に期待したい。以上の所見から審査委員一同、本論文を博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判定した。